女性

344
423

344-
エ2K42
344
423

露人の滿洲分割論

其一　滿洲分割論（一九一三年八月出版）

東清鐵道廳機關哈爾賓日報記者哈爾賓商業會議所理事長
ニコライ、シユテインフエルド

露國の勢力範圍たる北滿洲は、支那の版圖中、全然本土と隔絶せる一邊地にして、其四周は外國又は外國勢力下にある地域に依りて圍繞せらる。而して我露國は、東清鐵道補助の形式を以て、年々八百萬乃至一千萬留の巨資を此地に注入し、自ら好んで北滿洲に於ける支那の主權擁護の任に膺りつゝあるの狀なり。露國の立場の如何にも不自然なる所以を闡明するは、即ち本書の目的とする所なり。

抑も北滿の部分を支那の一部として持續することは、支那の統治者自身と雖も、尙且可能を信じ居らず。此事實は、北滿の大部を組織する黑龍江省に對する北京政府の態度の證明する所なり。即ち同省に對しては、北京政府は、從來何等の支持

一日會寄贈本
大正 3.5.29 寄贈

をも與ふることを爲さず、同省の經濟的發展＝偏に露國の行ひたる鐵道敷設と文化の扶植に依る＝に對しても白眼之を冷視し、否却て之が阻害を事とせり。夫の革命事變と同時に端を發したる官帖の暴落＝從前一吊文露貨五十哥替の相場は九哥に墜落するに至れり＝の如き、之れが所持者の損害は勿論、地方商業の破壞を誘致するに至りたるも、北京政府は何等救濟の措置を講せんとせざりき。斯かる冷遇を受けたる者、東三省中、惟り黑龍江省あるのみ。又夫の一九一〇＝一九一一年冬季に於ける、「ペスト」流行の際の如き、地方土民は、殆ど箇々全滅の悲運に瀕したるにも拘はらず、政府は全然之を傍觀せり。而かも一方に於て、黑龍江省は、政府に對し、支那南部よりの移民扶助の義務を負ひ、又何等國庫の補助なくして、蒙古征討軍隊編成の責に任じつゝあり。若夫れ支那國內に着手せられつゝある新政に至つては、該省に對しては、殆ど一として適用せられたるものなく、政府は地方の資源を搾盡するに於て、毫も餘力を殘す所なし。一九〇九年松花江に稅關を開設したるが如き其一例にして、年額百萬に垂んとする之が收入は、毫厘も地方の財政に寄與する所なく、擧て中央國庫に收められつゝあり。而して省民は、最も粗惡なる官

鹽一布度に對し、一留の重稅を負擔しつゝあり。滿洲の他の省に於ては、支那官憲は、馬賊の討伐に關し兎に角相應の努力をなしつゝありと雖も、黑龍江省に於ては、正式軍隊の將卒は、往々相率て馬賊の群に投じ、平然として尋常の職業に就くが如く、其軍服を脫却するの勞をすら敢てすることなし。地方住民は支那の他の何れの部分よりも、苛酷なる重稅に服し居るにも拘はらず、是等の稅金は、省民に取り、有益なる支途には、殆ど毫厘も充當せらるゝことあらず、而かも土民に對する各般の稅賦は、最近四年の間に約六割の增加を呈せり。以上列擧の諸點に鑑みるに、支那の業已に北滿洲の保有を斷念し、全く手を引き去りたるものなること、問はずして明かなり。之に反して、彼れが吉林省殊に奉天省に對し、比較的注意を怠らざるは、蓋し北京政府に於て、日本の勢力範圍たる南滿洲（近く日本の併合に歸すべき關東州を除く）の回復を以て、露國の勢力區域たる北滿洲に比し、容易の業なりと思惟しつゝあるの勢にあるに際し、我露國は、敢て其優越權を鞏固にするの措置を採らんとせざるのみならず、少くとも經濟的方面に於ては、着々其既得の地歩を喪失しつゝあり。頃日、哈爾賓商業會議所が、關係各省に提出せる陳情書は、此

點に付、反覆論明又餘蘊なし。諸君は、宜しく之に就き其詳を盡すべし。蓋し該陳情書は、露國北滿經營の敗頽を疾痛憤慨しつゝある我居留民一般の最高利益の皷吹に成り、極東に於ける我當局官憲の意嚮は暫く擱き、苟も眼に露國事業の不振を見、脚底我地盤の動搖を感じ、將來に對し、深大の危惧を懷きつゝある北滿商工業者、宅地所有者、其他地方經濟界一般の叫聲は、凝て右の一篇となりたる次第なりとす。嗚呼、予は覺えず此興味ある公文に對し、讀者の注意を喚起するに過ぎたり。請ふ之より本書の主題に立歸らん。

日本が、強大國の班に列し、支那亦政治上社會上の根本的改革を始めたる事實は、極東に於ける露國の立場をして、十九世紀末葉に於けるとは、全然其趣を一變せしめたり。各種の新問題は、現に吾人の當面に横生し、從前見ざりし危險も、亦之に伴隨せり。此秋に當り、露國は、其極東政策に、何等の生面を開くことなく、殊に支那に對する我外交に至つては、全然偶發の事情に制せらるゝを常とせり。而かも所謂偶發の事情なるものは、我意思の得て左右する所にあらざるや言を俟たず。惟ふに日露戰役の不運以來、『露國は、極東に於て、最早活動的政策を採らず』とは一般の格言となれり。知らず、其意味果して如何。蓋し所謂『活動』の意に反し、『受動』を旨とするにある乎、否之すら今猶解決を見ざる疑問たり。

既往幾年の久しき、露支兩國の關係は、常に葛藤を絶たず、而かも弱者なる支那は、其都度攻勢の態度に出で、偉大なる露國をして、却て其壓迫に苦しましむるの狀あり。之を以て之に對し、露國は、事毎に抑損自制を旨とし、偏に彼れが感情を寛和するの方針を採り來れり。斯の如きは、未だ半開人種たる亞細亞人の心理作用を解せざるの致す所とす。彼等は、强力の刺擊に依るの外決して國交の正道を履むものにあらざるなり。且夫れ吾人は、須く記臆せざるべからず、支那は、古來斷じて外國との親近を欲せざる國たるを。國家存亡の場合に於ても、尚且つ甘じて孤立の政策を墨守せんとするは、彼れ支那の眞情なり。世界何れの國と雖も、未だ曾て支那と同盟は勿論些毫の政治的接近をすら誇りとしたるものなく、支那亦、敢て他國との提携を冀ひ、又は他國の援助を望むものにあらず。彼の所謂『善隣の交誼』てふ常套語の如きは、畢竟一個不詳の空言に過ぎざるのみ。支那が、露國を以て、强勢無比の雄邦と思惟しつゝありし時代には、彼我の國交は、洵に親善なりき。而か

も露國の一たび日本に破らるゝや、支那は之を以て復恐るゝに足らずとなし、夜郎自大、國庫の病的窮乏と、軍備の寡弱を顧みず、敢て自ら北方の强隣と猗角し得べきを妄信し、我を輕ずるに至れり。況や支那の革新――詳言すれば先進文明國の皮相的摸倣に外ならざる――は、歩一歩、彼れが政客の空想を煽揚し、其國民の自信を皇張しつゝあるに於て、露支の衝突は、早晩之あるを免れず。例へば蒙古に於ける保護權の設定に徵するに、我外交に對する予輩の批評は、一見其當を失するやの觀ありと雖も、其實斷じて然らず。成程蒙古保護權の設定は、近來の快擧にして、輿論は已に之に依りて、極東に於ける幾多外交上の罪科を宥恕せんとするものゝ如く、近東に於ける『スラブ』民族壯圖の挫折すら、之れに依りて幾分の慰藉を得るに幾かく、素より以て外交上の一成功たるを失はずと雖も、而かも蒙古問題が、結局如何の解決を見るに至るべきやは、吾人未だ得て知る所なく、況や保護權の設定は、露國外交本來の針路と、全く關係なき特種の行動たる事實は、吾人敢て茲に言明せざるを得ず、吾人の記臆に據れば保護權設定に關する蒙古の請願は、支那の革命前にあつては、絶對に露國の峻拒する所と爲り、唯其後、蒙古自ら支那の羈絆を脱却して自立

の計に苦しむに迫び、露國は、茲に始めて保護の任を引受けたるなり。斯の如く、本件は全く一種の特發事件たるに過ぎず、而かも露國極東政策の關鍵は、蒙古にあらずして滿洲にあり、何となれば、滿洲は寔に極東の三大邦たる日露支三國の重大なる利害の交錯地點たるを以てなり。

顧ふに露國は、其滿洲貫通鐵道敷設を行ふに當り、全く日本の勃興と、支那の覺醒を豫籌せざりき。殊に後者に至つては、支那の當路者自身と雖も亦、當時豫期せざる所なりき。現に東清鐵道敷設權讓與に關する故李鴻章の奏議にも、『支那は自ら滿洲の開發を圖るの力なきを以て、宜しく露國をして之に當らしむべく、之に依て將來自ら利する所あるべし』との語あり。露國も亦素より、滿洲の終に我有たるべきを豫想したり。駿馬も時に躓くことあり、流石の滿洲鐵道創搏者**ウ井ッテ**も彼れ李鴻章も、共に此點の打算を誤りたり。爾來の出來事は、世人の周知する所、復た予輩の贅述を須ひず。今や北滿洲は、何等露國の有たる觀なく、之が首都たる哈爾賓は、比年各國共同的の色彩を加へ其何國の主宰に屬するやは殆ど之を知るに由なからんとす。一九〇六年以前にあつては、哈爾賓は、一般に露國の都會と認

められ、支那人も外國人も、何等の異議なく露國の政權に服從し居たり。其後外交の遣算に因り、哈爾賓に外國居留地の性質を添加すると共に、先づ露國領事の派駐あり、他外國領事諸君も、素より踵を接して此地に光臨せられたり。以來彼れ外國人は、截然我政權の外に獨立し、一九〇九年制定の哈爾賓市制は、諸外國の抗議する所となり、外國人は、市稅の納付をすら之を肯せず、而かも一方に於ては彼等は、着々吾人露國人の手より、商業工業、並に金融業をも奪取するに努め、且つ地方土民と露人間の經濟的接近を阻碍しつゝあり。思ふに『門戸開放主義』なるものは、東清鐵道敷設當時は、全然我露國の腦裏に存せざりし所、其後幾星霜、恰も是れ露國が極東に於て、自家の利益を支持する力を失し、殊に滿洲に於ける自國民の事業保護の方針を棄てたるの時に際し、彼れ外國人は、陸續北滿に侵入し來れり。去れば北滿に於ける支那の主權擁護を任務とせる我露國は、最近數年來は、其實支那よりは、寧ろ他外國人の爲めに盡しつゝあるの姿なりとす。遮莫予輩の所見を以てするに、支那の主權擁護の努力の如きは、全然無意味の徒勞のみ。何となれば、南北何れを問はず、滿洲の地が支那の有に復歸するが如きは、未來永刧斷じて之れ無かるべき

を以てなり。請ふ左に之を論明せん。

施政改革の發軔以來支那は歩一歩財政困難の窮境に進入しつゝあり。而かも此困難たる、前途益々重大を加ふべきは、既往の經過に照し、寸疑を容れざる所なり。最近の統計に據るに、支那の人口は、蒙古西藏を除き、猶ほ四億一百九十八萬三千を算す。蒸々たる此衆庶に對し、歐洲文明の治具を整備せんが爲には、夫れ將た幾十億の鉅資を要とすべきか、素より思料に難からざる所。現に支那の革新は、纔に其端を啓きたるのみなるにも拘ず、歳計の不足は既に二億を超過し、五國借款が漸く成立せんとするの昨今、支那は已に更に新規の借款を企てつゝあるに非らずや、支那の各省は現今猶ほ財政上一個の半獨立國を形成し、地方政費の豫算のみならず、通貨兌換銀行、造幣局、並に軍隊警察等に至るまで、各省各異の施政を有するが上に、財權の掌握は、自ら地方官憲に偉大の勢力を附與するの結果、動もすれば、中央政府の意志に頓着なく獨立の政策を行ふものなきに非らず、右の次第にて、財政統一の一事のみにても、猶ほ幾多の爭鬪と歳月とを要し、而も其間國家は必然莫大の負債を惹起す可く、此負債の壓迫は、遂には支那を絶息せしむるに至る可きを信ず。加

之、全國に流通する各種の紙幣――何れも正貨準備の保障なき――は、現に約五億四千萬乃至六億の間を往來しつゝあり、之が兌換實行の一事のみにても、幾年の久しき、國庫を涸渇せしむるに足るべく、之を要するに、支那は、其國政の何れの部面に於ても、一として彼が現在の境遇と相容れざる莫大の支出を要とせざるはなく、支那の財政狀態を精査し來れば、支那の改革實行は、殆ど人間能力の想及し得ざる底の幾多難問題を伴生し、延て支那の國運を震蓋するに至るべしとの結論に達せざるを得ず。思ふに支那は、遂に國土の割讓を以て債務の辨濟に應ずるの已むを得ざるに至るべきを疑はず。

事情前述の如くなるを以て、支那が日露兩國、並に他外國人――現下滿洲に對し、鋭意各種の財的利益關係扶植に努め、以て益す滿洲の事態を錯雜ならしめつゝあり――の手より、滿洲の地を贖回するが如きは、現代は勿論、吾人が兒子の時代に於ても、到底之を見得べきにあらず、一八九六年の東清鐵道條約を按ずるに、支那は一九三九年に至らば、東清南滿兩鐵道を、實價を以て買戻すの權あり。此時に至り、日露兩國の要求すべき代價は、凡そ幾何なるべきか、試に之を査するに、露國が東清鐵道敷設の爲め支出したる金額は、約四億留にして、『ポーツマス』條約に依り割讓せられたる南部線に對しては、日本は之が改築延長等の爲め更に約九千萬留を費せり。若し夫れ鐵道附屬地に至ては、當初買收の爲め、露國の支拂ひたる高は、約四百萬留なりしも、現在にては、哈爾賓市内個人所有の土地建物のみにても、尚且時價三千萬留を越へ、大連に於ても、恐らく之より下ることなかるべく、尚ほ南滿鐵道の副業たる撫順炭坑に付ても、會社は之が設備の爲め、少くとも一千萬留は費したることなるべく、況や東清南滿兩鐵道附屬地内には、幾多市街地の勃興せるあり、是れ亦た少からざる價格を有するは勿論にして、之を要するに、該兩鐵道の價値は、一九三九年を俟たずして七八億留に上るべく、此價額たる、取も直さず支那をして、兩鐵道の買戻を斷念せしむるに至るべく、況や鐵道以外、滿洲に於ける諸外國の商業上利益も亦た、其頃には頗る增大し居るべく、旁以て滿洲贖回は、支那に取り先以て不可能と謂ふべく、支那が滿洲を回復するの途は、唯實力を以て、日露兩國より之を奪回するの一あるのみ。將來幾十年の後、支那にして强大なる軍國と成るが如きことあらんか、或は日露何れかの一國を滿洲より逐出し得ることあらん。而も一舉兩强を擊

攘するが如きは、斷じて企て得る所にあらず。況や滿洲に於ける日露の地歩は、既に牢として拔くべからざるものあるに於ておや。

思ふに日露の協調は、年と共に益々鞏固を加へんとす。蓋し巴奈馬運河開通の曉、日米兩國の間、太平洋の覇權に關し、激烈なる競爭開始せらるゝに至らんか、日本は、勢ひ背面の安全を必要とし、之が保障の代償として、支那に對する露國の安全保障を吾に與ふるに至るべく、日露兩國は、茲に『相互保險』てう實質的根蔕の上に、眞摯强固なる結合を確立するに至るべし。然るに顧て日露關係の現狀如何と見るに、兩者共に此政治的聯盟の要諦を閑却し、却て何等必要の素因なき經濟的接近に汲々たるの傾向あるを見るは、轉だ了解に苦しむ所なり。夫れ日露兩國は互に毫も其製產品交換の必要を感じ居らざるのみならず、現に極東の市場に於ては、兩者同種の商品を提供して、激烈なる競爭をなしつゝあるに非ずや、如斯の事情に於て、所謂經濟的接近の基礎なるもの、果して焉くに在りとする乎、之に反し、政治上の提携に至ては、既に上に說けるが如く、確乎たる現實の理由あつて存す。

相互の不信は、今に於て猶ほ日露の提携を阻害しつゝあり、日本は露國が復讐の企圖あるを疑ひ、露國は亦彼れを疑ふて思へらく、日本は沿黑龍州並に北滿洲を略取するに意あり、加之、日本は將來遂に全蒙古人種を提げて泰西に當り、露國は先づ其第一擊を被るに至るべしと。這般兩者の懸念は、素より極端の杞憂に屬す。露國に於て、眞面目に復讎戰を希望し贊成する有力分子、果して幾何かある、克く百人を算し得るや、否頗る疑はしきと同時に、日本が沿黑龍並に北滿洲掩有の野心を有すとのこと、亦全然無根に屬す。北滿に於ては、彼れ日本人は、唯だ吾人同胞が、母國の後援を有せざる爲め、餘義なく閑却しつつある有利事業を發見するに汲々たるのみ。日本が沿黑龍を目標として、軍備を修めつゝあるは、他なし、即ち東半球の列强中、惟り露國を以て恐るべしとなし、且亞細亞人の性情として、露國の復讎に意なきを信じ得ざるが爲のみ。而も右等地方の領有は、日本に取りては、徒らに煩累を加ふるの外、何等利する所あるを見ず。夫の比較的氣候溫暖なる朝鮮及南滿すら、尙且日本人の移住に好適ならざるの趣あるは、實驗の示す所にあらずや、蓋し日本人の當方面に來るは、單に本國に於ける生活難に驅らるゝのみ。其移住の一時的假寓に過ぎざることは、家族携帶者の極めて僅少なる事實に徵して知るべし。最近

日本の政治社會に、提唱せられつゝある新殖民策は、正しく國民の希望と合致せるを見る。即ち日本は其過剰勞働者を、熱帶及半熱帶の方面に吐出せざるべからずと云ふにあり。日本人の欲する所は差向き比律賓群島にあり。若し夫れ所謂蒙古人種統一、即ち日本の覇權の下に、支那、蒙古、暹羅其他の邦國を結合するの理想に至ては、疾く已に一個の死産に歸せり。何となれば、支那は到底他に服從するを肯せず、日本も亦、支那を除外し、亞細亞諸國の聯合を覓むることを爲さゞるを以てなり。滿洲の運命は、何等他の豫測を容れず、即ち早晩日露の分割に歸するの外なきのみ。露國は北滿併合に依り、日本及蒙古の領域を以て、支那に對する自家の障屏となすを得べく、是れ其直接第一の利益なりとす。蓋し支那は、常に露國に對し、惡感を絶たざるのみならず、輓近數年來、支那に對する我外交失敗の歴史に徴するも、支那との間に、緩衝地を置くは、露國の切要に屬すと云ふべく、斯の如くして、吾人は始めて克く、現在不快の隣人にして、而も我將來の危險たる彼れ支那の絆累を脱却するを得んのみ。予輩は尚ほ、北滿併合の、露國に與ふべき他の各種利益に付き、左に研査する所あらんとす。

一　沿黑龍方面露支國境の現狀に於ては、烏蘇里地方は、浦潮斯德と共に、容易に露國の手より割取せらるゝ虞あるを以て、前記國境線は、之を更改し、知多、浦潮斯德を連結する直線を以て、露支の國境となすは、國防上の須要に屬すること、軍事專門家の、擧て一致する所なり。

二　國庫は年來沿黑龍地方に對し、鉅大の犧牲を拂ひつゝあるも、地方何れの部分と雖も、收支相償ふべき見込あるもの、一も之あるなし。之に反し、北滿洲生産力の豐饒なる、現に年々四千萬留の輸出超過を呈し、尚ほ終始昂進の勢にあり、財政の混沌、官吏の腐敗、馬賊の横行、通貨の紊亂等の現狀にも拘はらず、北滿洲は、經濟上着々發展しつゝあり、之を優良なる統治の下に置くに於ては、北滿洲は、國庫の一大財源と成り得べし。

三　支那の海關年表に據るに、北滿洲に對する輸入貿易は、西比利亞及浦潮方面よりするもの二千零十萬留、大連方面よりするもの一千八百五十萬留にして、内露國品に屬するもの其半にも達せざる現狀なるも、併合の曉には、優に之に倍加し得べく、且つ地方生産力の發展と共に、多々益々露國製品の購買力を增大

すべきを忘るべからず。

四　露支國境線を、黑龍江より滿洲に移すの結果、沿黑龍地方現在の軍隊を滿洲に移駐せしめ以て多大の軍事費節約を實現し得べし。

五　前項軍隊移駐の結果東清鐵道守備隊たる後黑龍護境軍團は、不用となるを以て、其費用全額約八百萬留の高は、全然必要なきに至り、茲に始めて東清鐵道の收支適合を見るを得べし。蓋し該鐵道は、一九一〇年以來は、營業上、優に利益を擧げつゝあるにも拘はらず、尙ほ收支の總體に於て、多大の缺損を見るは、全く護境軍團維持費負擔の結果に外ならざればなり。而して該軍團裁撤と同時に、從來の兵營等は、直ちに之を沿黑龍方面より移駐の軍隊用に充て得べく、何等國庫に損する所なかるべし。

六　沿黑龍地方は、農業に適せるを以て、食料の供給を他に仰がざるを得ず。即ち粒穀肉類其他一般必需品の大部分は、遠く西部西比利亞より輸入せらるゝ結果、生活費及勞銀の高騰を來し、地方利源の開發に資すべき企業の發達を阻害しつゝあり。殊に沿黑龍と滿洲との隔絕を主眼とするゴンダツチ總督の政

策の結果として、沿黑龍地方に於ける穀物の市價は、已に頓に昂騰しつゝあり、將來益々甚しきものあるべきを疑はず。

七　滿洲は、農業に適する肥沃の地廣く、之に百萬餘の我農民を入るゝは、決して困難にあらず、西比利亞移民費を轉用し、當地方に農民を移殖するは、目下を以て絕好の時機なりとす。抑も我政府は、年來極東露領の拓殖に腐心し、殊に黑龍鐵道敷設着手以來は、益々移民の奬勵に努め、同鐵道完成の近くと共に、支那人を排斥して、之に代ふるに歐露の移民を以てせんとし、百方施設しつゝあるにも拘はらず、歐露よりの移住者の比年減少しつゝある所以は、畢竟農業に適せざる地方に移住强制の不可能なるに由るのみ。露國の西比利亞移民に成功せしは、唯だ貝加爾以西の地にして、其以東に於ては移民事業は、從來常に不成功に終れり。鐵道事業に至ても、貝加爾湖までは、有利なる收入を與ふるも、其以東は不足勝なり。露國が東清鐵道を、外國領土內、殊に農作物に適する地方に敷設し、却て後貝加爾州と烏蘇里地方を聯絡すべき幹線の敷設を後廻にしたる所以も、亦要するに、滿洲を以て、太平洋岸の露領に對する物資の供給地に充

つるの企圖に基かずんばあらず。是れ實に正鵠を得たる着眼にして、爾來滿洲は、粒穀、肉類、野菜、鷄卵、鳥類、馬糧等の必需品を後貝加爾州の一部、並に沿黑龍地方に潤澤に供給し、以て大に該方面に於ける住民生活費を低廉ならしめたり。啻に之のみならず、滿洲に於ける製造業發達の結果、沿黑龍市場に於ける米國製粉、獨逸製蠟燭、日本製石鹸等は、概して滿洲製同種品の驅逐する所となれり。右滿洲の製造業は、何れも露人の經營に係り、全く沿黑龍地方の需要充足を目的として成立するものなりとす。而も日露戰役の結果、痛切の打擊を被り、未だ全く回復に至らざるも、今や方に當初の企圖に（即ち滿洲を以て沿黑龍に對する物資供給地となすの根本趣旨）復歸し、着々事業の進捗を圖るべきの秋なりとす。若し夫れ露國農民を、豐沃なる松花江流域に招致するの案に至ては、予輩斷じて其空論にあらざるを信ずるも、或は露國に於て、當方面に送致すべき過剩農民の不足を感ずるが如き事情ありとせば、宜しく適當の農業地方を、我版圖に包擁する樣、適宜に國境線を按排し、以て支那農民を利用するの策に出づるを必要とすべし。』

北滿洲併合の結果、我臣民となるべき彼れ支那人は、由來從順且つ勤勉の民族にして、露國に對し、何等煩累となることなし。而して土民に對する行政官吏には、哈爾賓に於ける露國の各學校にて教育せられたる土人を用ふるを可とす。之を歴史に徴するに、露國は、概して異人種同化に拙なるも、而も亞細亞人に對しては、往々巧みに之を統治し、以て露國に有益なる臣民とならしめたるの例少からず、殊に支那人に對して然りとす。沿黑龍地方に在住する支那人は、二十萬の多數を算するも、我官憲は、未だ曾て彼等が制馭の困難を訴へたることあらず。此經驗に徴するも、滿洲統治は、露國に取り、敢て困難の業にあらず、寧ろ高加索方面に比し、遙に容易なるものあるを疑はず。

結論

滿洲の運命は、既往は、成行上已に一定せる所なり。其歸宿は、結局予輩の論斷せる如くなるべきを疑はず。然るに露國は、躊躇逡巡、却て日本をして、我に先ち斷然たる措置に出てしめつゝあるは、寔に一大失策と云はざるべからず。一日の遲滯は、適々以て、進取敢爲の競爭者に利すべし。洵に虞る、北滿洲の地は、遂に全く外人の勢力に包羅せられたる後始めて我れの版圖に歸するが如きことあらんを。況や

歳月の經過は、支那に與ふるに、益す滿洲分割防遏の機會を以てすべく、今日徒手にして之を獲得し得べきもの、後日は鐵火の抗爭と多大の犧牲を必要とするに至らんとす。如かず今に於て、斷然たる處置に出でんには。何となれば、支那は此際、毫も滿洲に念及するの餘裕なきを以てなり。

日露兩國の妥商を以て、滿洲の分割を實行するの時期は、正に到來せり。而して此の事たる、兩國の供したる人命、資財の無量なる犧牲に照し、將た又、支那の空しく放棄し居たる荒凉不毛の此邊地を開發して、露本國幾多の地方にすら勝りたる般賑の現狀に達せしめたる兩國＝就中露國＝の努力に鑑み、夙に兩國の正當權利に屬す。予輩の意見を約言せば、正に此の如し。

其二　滿洲分割急務論

露國陸軍中將　**マルトウ井ノフ**

曩に、黑龍江護境軍團經理部の不正事件を摘發し、端なく當時首相にして、後に藏相と黑龍江護境軍團名譽司令官を兼任せし**コーコウツエフ**伯の忌避に觸れ、退役となりし**マルトウ井ノフ**中將は、其最近の著書に於て、滿洲分割の急務を論じて之を公にせしが、今其梗概を概譯すれば左の如し。

所謂沿黑龍江地方と總稱せらるゝ我黑龍江、沿海兩州には、元來山林漁業其他天然の富源極めて豐富なれば、製造工業の勃興を促す關係甚だ良好なりと雖も、氣候及風土の關係不良なるに依り、一小局部の地を除く外、農牧に適する土地極めて少なし。沿黑龍江地方は、當今に至る迄人口甚だ稀薄なるに拘らず、既に滿蒙地方より、毎年穀物及麥粉概算一千七百萬フード、家畜約四萬五千頭の供給を仰ぎつゝあるを以て、將來同地方に工業發展し、人口增殖するに伴ひ、是等の物資輸入額は、多々益々增加すべし。而して全西伯利亞中農產品及畜產品の製造過剩を生ずる西部

西伯利亞は、沿黑龍地方より、數千露里の遠距離に隔離するを以て、沿黑龍江地方にて不足する物資を、露領より供給する事は甚だ困難なり。從つて沿黑龍江地方へ契子の如く灣入し、土地極めて豐饒にして、農牧の旺盛なる北滿洲より是を仰ぐの外、何等の策なし。農業本位の滿洲は、工業本位の沿黑龍江地方の不足を補ふ天與の土地なるが如し。近年**コンタツチ**總督が、稅關政策を以て、滿洲と沿黑龍江地方との經濟關係を斷絶せしめんと試むるや、沿黑龍江地方に於ける物價は騰貴し、各種產業の發展を阻止し、多數の倒產者を生じ、密輸入を異常に增加せしめ、同地方の經濟上、最も悲しむべき結果を齎せしが如き、以上の理由を益々明瞭ならしむるものなり。

軍事上の關係に於ても亦、滿洲は重要なる意味を有す。即ち貝加爾湖より太平洋岸に亘る地方に於て、大軍を自由に行動せしむると同時に、是に必要の糧秣を求め得る唯一の土地は、實に哈爾賓方面なりとす。敵が滿洲を占領する場合、露國は海軍に據らざる限り、沿黑龍江地方は防禦する能はず。從て然る場合沿黑龍江地方が、自然に露國の手を離るゝに至る事は、地圖を一見するも明白なり。換言すれば、滿洲は、戰略上我露領極東全體に對する咽喉部をなすものなり。以上の如く、滿洲は、經濟上軍事上、共に重大なる關係を有するを以て、吾人は、此土地を我帝國に併合する事を希望せざるを得ず。而も滿洲は、年年吾人に對し、不利なる狀態に變化しつゝあるを以て、至急之を斷行する必要あり。日露戰爭後支那政府は銳意北滿洲に於ける殖民事業の完成に努め、松花江及び嫩江の灌域、愛渾河及び黑龍江の右岸、ハンカ湖附近等、戰略上樞要の地方移民を吸集しつゝありしが、斯の如く、東清鐵道建設當時、到る處空漠にして、露人が意の儘に移住する事を得たる北滿洲の支那人口は、今や約四百萬の巨數に達せり。現今袁總統は、尙之にても滿足せず、更に進で、北京に邊境地方殖民局を設け、劈頭第一に、北支那方面の支那人を滿洲及び滿洲に隣接する內蒙古各地に移住せしむるに決し、是等の移民に對しては、無代にて土地を與ふる外、補助金を下附する事とせり。而して豫備移住地の面積は、滿洲のみにても尙約一千五百萬人の移民を吸集するに足ると云ふ。加之日本人も亦、近來我勢力範圍たる滿洲少くも哈爾賓方面へ移住を希望し、現に日本の正金銀行は、哈爾賓に支店を開設せり。此の如き情況にして尙數年を送らんか、此の豐饒なる北

滿洲には、露國農民を移住し得べき土地全く盡滅するに至らん。政府の滿洲に對する政策の前途は、毫も寛知する能はず、加るに滿洲に於ける我軍備薄弱なるに依り、東清鐵道沿線地に於る露國居留民は、常に戰々兢々として、身は恰も火山の絶頂に在るが如き感念を抱き日を送りつゝあり、從つて何れも前途何等畫策する所なく、永久的の事業を經營する能はず、支那人が露人部落を襲ひ、露人を屠殺すべしとの風説は、殆んど毎春流布せられ、其都度在滿露人間に恐慌を惹起するを常とす。斯の如き狀態なるに依り、滿洲在留露國商人が、永久的の大事業に投資を躊躇するは當然にして、況んや彼等が領有する、土地は、永久に其の者の所有物となるに非ずして、彼我兩國の租借條約に基き借受け居るに過ぎざるに於ておや。

滿洲に於ける以上の如き不自然なる狀態を巧に利用しつゝあるものは、機敏なる外國人なりとす。彼等は、假令如何なる場合に於ても、自國政府が保護する事を確信し、滿洲に於ける商業を逐次其の手に奪んとしつゝあり。佛人が主權を握る露亞銀行を始め、日英兩國の商業銀行、滿洲に於て盛に活動し、何れも自國民に對し、廣く金融の便宜を與ふ。哈爾賓に於ける一ヶ年間の貿易總額は、概算五千四百萬

留にして、內露國品の販賣高は、凡そ九百萬留、即僅々六分の一に過ぎず。露國が、巨額の國帑を投じて建設せし哈爾賓市は、今急速に萬國共同市街に變化し、而も外國人始め、支那人と雖も、協約上市稅の負擔を免れ、衞生警察事務に關する規則を遂行する義務無き等、露人に比し、反て多くは特典を受く。支那は刻下微力なりと雖も、此情態は、永久に持續すべきものに非ざるを以て、滿洲の分割は、實に焦眉の急務なり。支那も、困難なる內政を整理せし曉には、又々露國に對する戰備の擴張を復活するに至るべし。又茲に注意すべきは、日露戰役にて露國が敗北せし事、並に近來露國の外交が、常に優柔不斷なるに依り、支那に對する露國の國威を全然失墜せし事之なり。當今支那人は、露國に於ける內政不統一なるを以て、陸軍だに完備せば、露國を威嚇する事容易なりとの感念を抱けり。

過般の支那革命亂、並に其の後起りたる支那政府當局者間の不統一が、北滿洲を露國に併合するに絶好なる機會なりしは論を俟たず。而して日本政府は、此の好機會を熟知して、露國に對し、數次滿洲分割を提議せしも、露國は其都度曖昧なる回答をなし、之を避けたり。而して日露兩國が、假令南滿洲を分割して、之を自國に併

344
423

合するとも、刻下支那の勢力薄弱なれば、之が爲めに事局を紛糾せしむる虞なく、關係列國も亦多分支那より各自に分割を要求する位の範圍内にて止むならん。吉林より寛城子を經て東部蒙古綽爾河に亘り描きたる線より以北の滿洲を露國に併合し、外蒙古の境界を天山山脈及び砂漠の末端とし、外蒙古を勢力緩衝國となさば、露國と、露國に對し敵愾心を抱く支那とは、日本又は外蒙古の領地にて隔離せらるゝを以て、露國に對し、戰略上極めて有利となる。加之人口調密なる南滿洲、並に是と接界する外蒙古の一部を日本に併合する上は、日本は永久に我太平洋岸の地を窺はざるに至るべし。之に反し、露國が、將來尙ほ日本と提携するを欲せざる場合には、日本は遂に支那と同盟すべく、其極露國は、極東を全然放棄するの止むなきに至るべし。故に露國は、國家の利害關係上、一刻も速に滿洲併合を斷行せざる可からず。滿洲の現狀を變更するに當り、之を阻害するは、東淸鐵道なり。東淸鐵道は、現に行ひつゝある任務が、全く無意味のものとなるを以て、只管現狀維持に務めつゝあればなり。之れ滿洲併合斷行に對する一大障害なりとす。（丁）

終